

第三号 五月五日発行

東大斗争

獄中書簡集

「粗暴」と思われるのは

むしろ欣快。

まさに現実そのものの絶望的状态が
僕を希望で満たす。

目次

一、4月16日東拘より	水上26号(完黙)	一
二、4月28日	山吹健一(仮名)	五
三、4月21日	三井一征	七
四、4月?日	今井澄	八

六十九年四月十六日東拘より

水上署 26号

拝啓

僕の急速な、だが必然的な転回は友人諸兄におかれても、その意義において充分な理解を得ていないようで、少々居心地の悪さを感じるので、君たちに必要な「感化」を与えるべく、「現実的な」行為に及んだ。

僕は僕個人の「特殊な」東大闘争を根源的に闘い抜くことによつてはじめて、「総体としての」東大闘争を極限的に闘い抜いているのであるという処を見て欲しい。

いわばこれは、最底辺における「東大闘争」である。とにかくこのようなものの上に、身体と生命をかけた、国家権力との断固たる「対決」がある。

不十分なものであるが諸兄の手もとにとどける。現在、こんなものを書かなければならないのは、若干うんざりするが、これも自業自得。ご憫笑。

① 小生を見知つているほどの諸君には一応読んでもらおうとありがたい。

② 妹にもぜひ読んでもらつてくれ。なお折あらば（友人たち、反帝の諸君たちに読んでもらつた後で、救対の皆さんにも承知しておいてほしい。

③ 〇兄―豊兄、一読後友人たちのところへ持つていつて下さる。

④ 妹へ―ジャンパー受領。軽くてなかなかよい。なおゲルトももらつた。どうもありがとう。

① 「私有財産に対する疎外された労働の関係から、さらに結果として生じてくるのは、私有財産等々からの、隷属状態からの、社会の解放が、労働者の解放という政治的なかたちで表明されるということである。そこでは労働者の解放だけが問題になつていくように見えるのであるが、そうではなく、むしろ労働者の解放のなかにこそ一般的人間的な解放がふくまれているからなのである。そして一般的人間的な解放が労働者の解放のなかにふくまれているというのは、生産に対する労働者の関係のなかに、人間的な全隷属状態が内包されており、またすべての隷属関係は、この関係のたんなる変型であり帰結にすぎないからである。」（経・哲草稿「疎外された労働」）

② 「現今では、普遍的意識は現実的生活からの一つの抽象であり、そのようなものとして現実的生活に敵対的に対抗しているが、他方、私の普遍的意識は現在の、な共同体、社会的存在を自分の生きた形姿としているものの理論的な形姿であるにすぎない。だから、私の普遍的意識の活動もまた――そのようなものとして――社会的存在としての私の理論的な現存なのである。

「社会」をふたたび抽象物として個人に対立させて固定することは、なによりもまぜ避けるべきである。個人は社会的存在

である。だから彼の生命の発現は——たとえそれが共同体的な、すなわち他人とともに同時に遂行された生命の発現という直接的形態で現われなくても——社会的生命の発現であり、確認なのである。たとえ個人的生活の存在様式が類的生活の多分に特殊な様式であつたり、普通の様式であつたりする——そしてこのことは必然的なのであるが——としても、あるいはさらに類的生活が多分に特殊な、または多分に普遍的な個人的生活であるとしても、人間の個人的生活と類的生活とは別個のものではない。

……人間は、たとえ彼がどれほど特殊な個人であるにせよ——そしてまさに彼の特殊性が彼を個人とし、そして現実的な個体的共同存在とするとしても——同じ程度にまた思惟され感受された社会そのものの総体的性、観念的総体的性、主観的な現存であり、同様にまた現実においても、彼は社会的現存の直観や現実的享受として、ならびに人間的な発現の総体として現存するのである。」

(経・哲草稿「私有財産と共産主義」)

◎「自然および人間の自己自身による存在というものは、民衆の意識には理解しがたい。というのは、このような存在は実際の生活のすべて手近に理解できることと矛盾しているからである。」(同右)

文字通り「感覚にびつたりこない表象と生命のない抽象」の中でややぼり然たる想い。しかし語らねばなるまい。最近の金網ごしの言動不穏さに辟易しているかもしれないが、決して粗

野ではない心得。「粗暴」と思われるのはむしろ欣快。まさに現実そのものの絶望的状态が僕を希望で満たす。この高いボルテージを限られた言動に注げば、ごつごつした「粗暴」さの外観。しかし自分の貧弱さについてのものどかしさ。

いくつか夢を見た

その一。側腹が魚のように青白く光る母が柱に縋つて逃げようとするのをマサカリでメツタ打ちにして殺している夢。輪切りにした胸がまだピクピク動くので物も言わずに連打している。マサカリの血の色だけが鮮明(一月二十四日ごろ、警察の留置場で)当日検察官の陋劣な取調べを受けた。胸喉と懐柔、おどしとすかし、鞭と鉛をなげまぜにした、ブルジョア共同体への「再包摂」策動を胸のむかつくくような気持(II)検事による困家への再包摂と母による家族への包摂)で耐えていた。——特に母は、最近交渉をかつた。不和ということもなく。当時、想い出したことをかつた。その二。家族(その後救援を頼んだ妹を除いて)総員をまき丸太で乱打。その夢で歯を噛みしめて舌を切り、その後一週間ほどのどがはれた。(二月四日拘置所)父母等の物的精神的貧しさは僕にとつて永い間重い鎖だった。その貧しい彼らから僕は、何年か前まで学費を貰つていたのだ。下の妹は僕の精神的苦悩を若干なりとも理解しうる立場にあるので夢の中でも間に立つてたどおる。その三。僕にとつての「朝倉先生」を公開の席で嘲笑した夢(二月十日ごろ)

われわれの掲げる七項目要求は、全有産階級の「人心の最も
烈しく最も度量で最も厭わしい情念」即ち「私利私害からする
激怒」を呼び起こし、「自らの狭少な利害がおびやかされるこ
とに対する恐怖」を感じた彼らは、プロレタリア的団結を血の
海に沈めようと急速に「秩序党」（＝生産階級に公然と対抗し
て、所有階級のあらゆる競争的分派、朋党によつて形成され
た連合）を形成した。それに対抗して、「一個の人間としてこ
こで踏みとどまろう」と決意した時、僕の中で何かが確実にふり
捨てられ、打ち毀された。

① 「物質的な、直接に感性的なこの私有財産は、疎外された
人間の生活の物質的な感性的な表現である。私有財産の運動につ
いての、すなわち、人間の現美化あるいは現実性の運動につ
いての感性的な啓示である。宗教・家族・国家・法律・道徳・
科学・芸術等々は生産の特殊なあり方にすぎず、生産の一般
的法則に服する。だから、私有財産の積極的止揚は、人間の
生活の獲得として、あらゆる疎外の積極的止揚であり、した
がつて人間が宗教・家族・国家等々から、その人間的な、す
なわち社会的な現存へと還帰することである。宗教的疎外そ
れ自体は、ただ人間の内面の意識の領域でだけ生ずるが、し
かし経済的疎外は現実的生活の疎外である。——だからそ
の止揚は（意識と現実という）両側面をふくんでいる。

（経・哲草稿「私有財産と共産主義」）

② に関連してついでに引用しておく

③ 「もつばら個々の人のうちにだけ芸術的な才能が集中して
いること、そしてこれに関連してひろく大衆においてその才
能が抑圧されていることは、分業の結果である。しかしある
社会的諸関係においては、たとえ各人がすぐれた画家である
としても、このことはまだ各人が独創的な画家でもあるとい
うことをすることに決してならないだろう。したがって、
ここでもまた「人間的」労働と「唯一的」労働との区別は、
一片の無意味なことになつてしまふ。いずれにしても共産主
義的な社会組織のばあいには、純粹に分業からうまれる地方
的および民族的なせまくるしさのもとに芸術家が包摂される
ことや、この特定の芸術のもとに個人が包摂されてしまふこ
と、したがってかれがもつばら画家、彫刻家などであること、
またすでにその名称もかれの職業的発達のせまくるしさと分
業へのかれの依存を十分にあらわすということもなくなつて
しまふ。共産主義社会には画家などはいず、ただか絵を好
んでえがく人々がいるにすぎない」

（ドイツ、イデオロギー岩波版202ページ）

右の「芸術」のかわりに「科学・家族・国家」等々
を入れ、必要な字句修正とともに読むこと。

僕は東大闘争に終始「参加できない」という形で「参加」してい
た。そういう緊張の中にあつた。何故「参加」できなかつたか
と言えば——これは今にしてわかるのだけれど——自己が
二重化していたからであつた。後に述べるようにこれは父母等
の二重化を受継ぐものとしてあつた。つまり、意識と現実とい

う両側面における彼ら社会的極貧層の二重化を同じ社会性の中で継受していたのだ。しかし「学生」の場合にはよくあることだと思いが、それは主に「意識」の側面において半ば自覚されていたのみであつた。その頃僕にみえていたものは何か。――まず、第一に自己の貧弱さ／＼しかしこの貧しさは環境の状況の貧しさの産物としてのみ考えられ、受動的にのみ、したがつて外から来て自分を呪縛する桎梏をしてのみ、受取られていた。この貧しい状況を貧しいままにしておくのが、他を知らぬ

「自己」の「欲求」の「感性」あるいは「人間性」の「貧しさ」であるということに思ひいたらず、ただ無気力に呻吟していたのみであつた。人間的「欲求」の「豊かさ」(もちろんこれは歴史的、社会的な制約をもつてはいるが)が、まず「前提」に無ければ、いかなる「人間的活動」もありえない。

「人間は環境と教育の所産であり、したがつて人間の変化は環境の相違と教育の変化との所産であるという唯物論的学説は、また教育者自身が教育されなければならぬ。ということをおぼれている。したがつてこの学説は必然的に社会を二つの部分に分け、そのうちの一方は社会よりも優越しているとすることを要する(たとえばロバート・オーウエンのばあい)。環境の変更に人間的活動の変化あるいは自己変更とは、ただ革命的实践としてのみとらえられ、合理的に理解される。」――石の(ロバート・オーウエンのばあい)に加えて、さらに「自派勢力」を「聖なるもの」――もはや変化する要なきもの――として聖別し、「困込む」、あらゆる小市民たち(新旧のスター

リニストたち)を付け加えよう

したがつて第二にかくして自己を抽象した「社会」のみすぼらしさ、非人間性は看過し得ないものとして、何らかの「変革的」実践が問題となるとしても、その時点で見えるのは「外化」し「認識」したものとしての「疎外」のままの「政治」にともなう「死」の黒い影。そのようなものとしての陰惨な政治闘争。小市民的スターリニストの地平。あくまで「人間的なものとしての政治」「権力」の「奪取」(へーもちろんしかし断固たるそれ)したがつて「プロレタリア独裁」の道義性、必然性に対する無知。したがつて一方において自己の「生得的(?)」な「社会性」の「いましめ」を突破しえず、自分の下半身を(経済的社会的地位等を)社会の激動に置く(つまり小市民としてしかるべき安全圏に逃げ込むべく、とりあえずその内容には目をつむつて非人間的な学問)を獲得しようとする)という不可能な社会からの自己の抽象の「固定」化をめざし、他方において、いれば上半身において、その安全圏に足をおいたまままでそこから、社会の「流動」激動にかかれろうとするアクロバット(必ずすなわち一方において帝国をぬりかためつつ、一方においてそれをこわそうとするだらしない矛盾。)その不可能性の証明としての日常的な蹉跌と間歇的な消耗のうちに地をはつていた。自分はこのようにやましい(必ず私利私欲にとらわれた)、うすぎたない存在を続けているのだが、「本当の自分」はそうではない(いつの日か本当の自分になるのだ)という幻想のうちへの逃げ込みによる二重化。この二重化(宗教構造の

突破を迫ったものこそ、産学協同路線（＝産業合理化への教育の適合そのもの）を現実的・現代的に粉砕することをもって日本帝国主義そのものに死をもたらそうとする東大闘争＝全国教育闘争だった。

「……現世的な基礎が自分自身から浮きあがって、一つの独立の王国を雲の中に確立するという事実は、まさにこの現世的基礎の自己矛盾とからのみ説明されなければならないし、次にこの矛盾をとりのぞくことによって実践的に変革されなければならぬ。……」

（マルクス・フォイエールバッルに関するテーゼ）

（次号に続く）

四月二十八日東拘より

山 吹 健 一（仮名）

「獄中書簡集」を楽しく読ませていただきました。僕は一介の東大生で加藤さんや真崎さんとは一面識もありませんが、この様な書簡集を発行してくれたことに感謝しつつ、ついつい何か書きたくなってしまった訳です。

書簡集には色々と個人的ないし内面的なことが書かれています。実は僕はそういうことを書くのが非常ににがてです、あまり個人的なことばかり書いていても仕方がないでしょうから、僕はこの拘置所の内から、現在最も必要とされている、全共闘運動の一切のことについて、僕なりに体験し、感じ、考えたことを書いて、今後の運動の発展の一助としたいと思います。

この前読んだ「進撃」に全斗全国評議会構想について少しばかり書かれていました。昨年の11/22に反代々木系の一大統一行動を実現しつつ、安保以来四分五裂していた学は戦線を全共闘運動という形で一定程度コクフクして来たことは大いに評価されるべきだと思えますし、学園闘争が全国的におこって来て、対政府の政治斗争へと一段と運動が深化せざるを得ないし、又そうすべき局面にあって、今までの全学連にかわる全共闘連合構想が出現してくるのも最もだと思うのですが、事はそう安々とはいいがたい様です。学園斗争を通じて形成された全共闘はそれ自体としては高々「新大管法粉砕全国学園共闘」位にしかな成長しないでしょう。それなのに進撃には「安保、沖繩斗争へ向けての全共闘の革命的強化」と言っていますが、これは無理でしょう。そもそも全共闘は沖繩斗争で米大に行くのですか、それとも国会あるいは防衛庁……。政治組織でない大衆組織としての全共闘が今までは直接関係の無い政治斗争にそのままストレートに決起することはできず、決起するときにはその内部で様々の論争が行なわれた後のことです。そうでないならば一部の者が全共闘を引き回したということになるでしょうし、又全共闘が単なる反権力主義者の集団になってしまうでしょう。

考えてみれば全学連にしても政治組織が日共だけだった時には、全学連としての機能を果たせたとしても、政治組織が決定的に分裂した時には全学連も分裂せざるを得なかった訳です。政治組織の立場から見れば全学連は一種の統一戦線でしょう。この統一戦線の考え方が未熟であったが故に、政治組織が決定的に対立すれば

全学連も分裂するという悪循環をくり返して来たのです。今、この悪循環がノンセクト・ラジカルが斗争をさへえるという形での全共斗運動としてコクフクされたのですが、しかしここに悪しき逆転現象も生じてきています。それはセクトナンセンス、全共斗万能主義です。これが生じてきた要因の第一に、セクトの側の責任と同時に、ノンセクト・ラジカルと自称している人達にも責任の一端があります。

まずセクトの責任。統一戦線の未熟さ、セクト主義、理論的欠陥等々。これらことはセクトの諸君にも感じていることで、すし、セクトそれぞれに総括しているでしょうが、自己のセクトを絶対化した形での、全共斗運動ナンセンスという言い方は絶対にさしひかえてもらいたいと思います。

次にノンセクト・ラジカルの諸君に。セクトに対する不信感は大いにあるとは思いますが、その不信感を、政治的組織者へと高めることにより堂々とセクトの人達と革命的な論争をいどんで行くべきです。そうではなくて、自己をノンセクト・ラジカルとして固定化するのにはアナルコサンジカリズム（急進組合主義）であり、無責任でもありません。あの攻防戦においても、東大のノンセクトラジカルと言われた部分が少なかつたということとわ通切に反省すべきです。ノンセクト・ラジカルとして自己を固定化し、そうすることによつて、斗争に無責任にかかわるといふのは絶対にやめていただきたい。

少々話がそれてしまいましたので、最初の問題にもどります。全共斗連合です。学園斗争を闘つてきた全共斗を直接政治斗争

を闘う部隊へ高めるといふ考え方はアナルコサンジカリズムであつた。それは無理というもの。何とかして学生戦線の統一をノという気持は分かるのですが、その場合には、自己を一たん政治組織者へと高め、そうしてから様々の意見と論争し、政策協定を結んだりしながら、別個に政治斗争を組織していくという過程をとらなければなりません。つまりノンセクト・ラジカルの固定化ということとは絶対にあり得ないし、それは反動的であり、無責任であるということです。ノンセクト・ラジカルと自称する諸君、君らは大いになやみ、セクトの人間へと自己を高めなければならぬ。セクトを選べということではない、いのがなかつたら自己で作らなければならぬ。

最後に革マルの諸君のことについて書きます。今、外では東大斗争で敵前逃亡を行つたというので風あたりが強いようです。この問題は色々考えてみる必要があります。特にノンセクト・ラジカルの諸君から革マルの体質は代々^本的だ、スターリニスト的だとよく言われますが、それを言う立場は自由主義的であり、無秩序的なものです。これは間違つています。僕は、むしろ革マルの組織体質は極めるべきだと思ひます。革マルは裏がえしのスターリニストだから、東大から逃亡したのではないのです。問題は別の所にあります。あの様な総力結集型の攻防戦を行うべきだつたのです。機動隊を数で圧倒する位に。革マルは断固攻防戦の始まる前に他セクトとそのことについて論争すべきでした。その論争も行なわれず、おざなりに法文二号館に13名のこしておいたとすれば組織温存主義者だと言われても仕方の

ないことです。

外にいるすべての諸君、特にセクト諸君、革マルとの後ろ向きな論争は益がないから、やめる様にしてほしい。第二の六一五を再び作らないために、法文2号館の13名は、他のセクトの者は分離公判を認めた者がかなり出ているのに、唯一統一公判を全員がめざして頑張っているではないか。

今日は4/28です。この手紙が着く頃はすでに4/28は終わっているでしょう。この手紙が4/28斗争の成功的発展の祝福になればいいと思つています。 さよりなら、

四月二十一日 東拘より

三井 一 征

すべての同志諸君

4/28を頂点とした4月斗争のとりくみに昼夜をわかつた奮闘をつづけていることと思います。その熱気が厚い壁をこえて、独房の中にも伝わってくるきようこのごろです。

とりわけ僕達を歓喜させたのは、早大における第二次学館斗争の開始です。4月1日の第2学館突入に続き、今反帝学評を先頭に本部封鎖が敢行されているニュースは、日和見主義者、革マルの反革命的武装制圧下にワセダがおかれてしまひ、そうだった春から年頭の苦しい時期を闘い抜いてきたものにとつて、何よりも感激的なニュースです。詳しいことは今のところぼんやりと判明しませんが、新聞報道などの断片をつづりあわせてみると、どうやら革マルのぶざまな狼狽ぶり、当局への癒着さ

らには、再び反革命的武装をもつて敵対してきている様子がみえるようです。

1・18・19を頂点に爆発した反産協の闘いとしての教育斗争がその質と規模の偉大さ故に引き出した支配階級的復讐と大攻勢の故に、それにうちかつたための更に革命的な闘いの構築のために余儀なくされた、その後の苦しい準備期が、今4・28を当面の頂点として70年をみつめて再び激しく爆発しようとしているのが、ひしひしと肌伝わってきます。

情勢は、朝鮮人民への武装挑発など、反革命戦争の到来が、もはや一般的な可能性としてではなく、極めてリアルなものとしてさし迫っており、またそれと併行してファシズムの到来も、もはや疑いない事実であることを如実に示しているようです。

そして、そのような情勢のなかでは、完全に、日本の労働者階級の運動が帝国主義社民型の運動に屈服してしまわんとしている様な絶望にも似た苛立ちを僕達に与えます。この悲痛な現実、一方ではもはや既成の労働者運動から全く断絶した地点に身を置いてしまふ事に「戦斗性」を見い出す部分を生み出し、他方では、ただしがみつくことのみ延命策を見い出さんとする部分を生み出しているようです。しかも、ぼくたちははつきりと確認しなくてはいけない。時として嘔吐をもよおさせる程絶望的に見え、愚鈍に見える労働者、学生大衆自身がやはり自己を解放してゆく闘いの主役であること、それからの個人的な訣別はたやすく、又それへの追隨はたやすくとも、結局は、それは悪しき前衛主義か、オプズブの大衆追隨主義でしかないこ

と。その両極を、両極ながら止揚しつつあったのが、この間のめざましい生命力を人々の前に示した行動委員会運動ではなかつたろうか。行動委員会一それが、ぼくたちの手によって目的意識的に形成されたものであれ、自然発生的に発生して発生したものであれ、運命こそ驚くべき規模と驚くべき速さで、全国を教育斗争で埋めつくし、結びあわせ、成長させていったものであることをぼくたちは知っている。だからこそそれは、未曾有の弾圧の下で多くの戦斗的学友が監獄に致され機動隊の戒厳令下に斗いがおかれても、決して死滅することなく、次々と新たな生命を芽ぶき増殖し、成長しているのだと思う。

今4/28を当面の頂点とした熾烈な斗いを展開するに当り、ぼくたちは多くの困難につき当っている。それは東大の一月の生々しい恐怖と70年への不安が、かつてなく大規模かつ、残る弾圧へ支配者階級をかりたてていることであり、又斗う内部においても路線上の目に見える相違が、プロレタリア的斗いの前進にとって少なからぬ障害になっていることだ。

しかしすべての同志諸君！

困難こそ、ぼくたちにとって最大の教師なのだ。反帝学評によって疑いなく索引され、今なお続けられている東大斗争の革命的な意義を繰り返し斗いの根底に据えつつ、4月斗争更には一連の斗へ向けて、巨大な前進を続けようではないか！

ぼくたち独房で日々斗っているものにとって、唯一の消耗とは同志と共にスクラムを組んで、資本とその権力へ敢然と斗いを組めないことだ。しかし、この独房の孤独と沈黙もまた、権

力への斗いの一形態であるからには、ぼくたちは、むしろほがらかに斗いに耐え抜こうというものだ。たとえ何年でも……ともあれ4/28への熱気とフセタの感激に、あたふたとペンをとった次第です。

では同志諸君！ともに頑張ろう！

4/21日

三井 一征

四月九日東拘より

今井 澄

1・18/19斗争とそれが切り開いた全国学園斗争は、東大斗争がこの1年有余の発展過程で登りつめた地平と、10・8羽田斗争以降の学生運動が10・21新宿斗争を経て切り開いた地平がみごとに一致したものとしてみ現された偉大な斗争である。

全国学友の総結集をもって斗かわれた1・18/19斗争は、言ひまでもなく一東大斗争の帰趨のみにかかわるものでもなければ、敵側の各個撃破の最大拠点を守るといっただけの意義で斗かわれたものではない。それは、68年全国学園斗争がもちろつた高度な質を69年斗争の爆発として実現し、70年安保沖繩斗争へ連続的に発展させ得るか否かの帰趨を決するものであった。もちろん、こり言ったからとてそれを「斗争の激しさ」や「活動家」を70年斗争へもち込むことなどと歪曲する者があるとすれば論外である。

1・18/19斗争は69/70年斗争の帰趨を決する斗争であつた

と云うのはどのような意味ですか。1・18と19の斗争は、軍事的に勝利するか否かにその斗争自体の勝敗がかけられていたのではないことは明らかである。1・18と19の斗争は、内外の一切の権力機構を動員し——つまり、学内にあつては右派・民青の力、諸手続、学外からは機動隊と斗争を圧殺し、「正常化」——旧秩序の回復をはからんとした政府官憲と大学当局の一体となつた挑戦を真正面から受けて立ち、当局の意図を挫折させることにあつた。そして、我々は、見事にその勝利をかちとつた。当局の意図した秩序回復は今だに、機動隊と化しても、果されていぬのみならず、ますます混乱が深まつているのではないか。政府・官憲の意図した治安維持も、我々の部隊を追い廻し、たしかに斗争を困難ならしめてはいるが、隊列は減少してはいないし、戦術も決して低下してはいないではないか。

我々が断固として斗い抜く限り、機動隊は学内に留まることになるだろうが、そのような状態は誰が見ても「正常化」されたものとは思えないし、そのような状態下での「改革」が何の前進「解決」をも意味しないことは明らかである。それよりも全ての人々の眼には、機動隊をもつてしても強引に守られねばならない「秩序」や「学問研究」「教育」の階級の本質がますます明らかになるだけである。

すでに、18と19日、機動隊の側からしか斗争を見聞きすることができなかつた多くの労働者・市民の中にすら、「あんなにまでして行なわねばならない」「正常化」とは何か」という疑問が広汎に浸透し、さらに「あんなにまでして斗つた学生は何

を訴えたのか」という開心が拡まつている。そのような情勢の中で、我々を無視し抑圧して「正常化」を行なおうとしても、もはやそれは不可能なのだ！

我々の1・18と19の斗争はこのように「正常化」を不可能にすること、つまり、学内に秩序が回復し得ない状況をつくり出すことによつて東京帝国主義大学解体を一步進めたのである。

我々の1・18と19の斗争は、東大における秩序回復を不可能にし、混乱を深めたのみでなく、帝国主義大学解体の斗争を全国学生総叛乱として実現する突破口となつた。それは京大を中心とする全国入試阻止斗争として爆発した。この入試阻止斗争は帝国主義大学解体と帝国主義教育秩序解体の思想を持たずして斗い抜き得ない斗争だつたのだ。丁度、東大における全学バリケード封鎖斗争が、その以前の「東大の一切の機能を麻痺させることによつて当局に迫る」といつた位置づけを中心とした思想では斗い抜き得ず、一切のブルジョワ的、すなわち現存の学問研究・教育を否定することをも含めた帝国主義大学解体の思想をもつて始めて提起し得たように……。

1・18と19の斗争はまた、戦後民主主義に破産宣言をつきつける斗争でもあつた。「七学部代表団」なるボツタム自治会の形式民主主義のつとつて斗争を收拾しようという策動を完全に粉砕し、斗いの中の直接民主主義——それは、全共斗の歴史と共に生まれ発展して来たが——を高らかにうたい上げた斗争でもあつた。

戦後20数年の間に、たゞひたすら、支配階級の支配を平和的

に貫徹するための手段、多数によつて少数を圧殺するといふおきまりの儀式と化した議會制民主主義は、人民の生活と權利を守るものとは全く縁もゆかりもないものになつてしまつた。議會制民主主義を軸とする「平和と民主主義」の思想は形式民主主義を通して平和的に歴史の変革へのエネルギーを圧殺する以外の何物でもなくなつてしまつた。

そしてまた、戦後民主主義への破産宣告は、同時に「進歩的」「民主的」学者・文化人への訣別をも意味した。彼らは、ブルジョワ支配の補完物としてエセ民主主義や「進歩」の幻想を振撒くことによつて、人民の斗争の芽を抜いて来たのであつた。

1・18と19斗争は、このように、支配階級による秩序を否定すること、つまり混乱の深化・永続化、戦後民主主義への破産宣告と斗う直接民主主義の確立・そして、一切のブルジョワ学問・研究・教育の否定を打ち出すことを通じて、斗いの中から新たな秩序の創出を提出した。

それは、10・8羽田斗争以後の学生運動が、10・21新宿斗争において明らかにした地域的混乱、地域的人民権力樹立の斗争と内容的に結合するものに他ならなかつた、かくして、1・18と19斗争は東大構内と神田において呼応して斗い抜かれたのである。

既成秩序の破壊以外の何もなお、そのことによつてもたらされる混乱は、ブルジョワ階級による階級支配の貫徹が困難となることをのみ意味する。そして、かかる混乱はやがて新しい人民による人民のための秩序が拡大し、それをもつて收拾されるための前提に他ならない。

このような既成秩序の破壊は、既成秩序の中につちりと組み込まれている人民の叛乱によつて行なわれるのであるが、それは、その叛乱に決起する個人個人にとつて見れば、日常性からの脱却に他ならない。既成秩序の破壊は、当然にも、その秩序を是とする価値観の否定、破壊抜きにはあり得ない。秩序維持によつて守られていた幾千万の神話の破壊である。いわく、市民生活の安全、平和、繁栄、進歩、向上：とりわけコンピュータ革命等が云々される現代にあつては「科学技術の発展が人間社会の進歩をもたらす」という神話が根底から破壊されねばならない。

このような神話の破壊は、これまで一つしかないと考えられていた人生が、実はもう一つあることを明らかにする。資本制社会において、賃金奴隷として、いわゆる管理社会につちり組み込まれ、繁栄をおしつけられ、消費の拡大を強要される生活をはつきりと拒否し、抜け出すことが可能であることを、既成秩序の混乱は示してくれる。そして、労働者階級を先頭とする人民の斗争の戦列に加わるといふ輝かしい人生を示してくれる。

我々の斗争は、既成秩序を温存し、とりわけ、自己の日常生活を温存したまま、進められるものと考えない。かつて、斗争はある日、ある時街頭に出、中央諸官庁にデモを行なうという形で斗われた。学生のストライキ斗争も、大学における日常的な教育・研究をほんの一時期中断するだけのものではなかつたし、労働者のストライキ斗争も似たりよつたりのものだつた。つまり、かつての斗争は、ブルジョワ的な日常性と日常性の間をつめるような形で斗われていたにすぎないと云つても過言ではない。このような斗争は、「平和と民主主義を守る」という観点から、それを侵害しようとする政府支配層に反撃を加え、

侵害を断念させるといふ闘いであって、つまり、ブルジョワ秩序を守るものであって、既存の秩序そのものを支配階級の秩序としてとらえていなかったのである。さらに、このような斗争は、せいぜいのところ、政府支配層のある政策の貫徹を阻止し、そのことを通じて、ブルジョワ支配の貫徹を困難ならしめ、その結果としての支配秩序の混乱を期待するといったようなものであった。

このような斗争が斗われて来た根底には、くり返して云うが、既存秩序は支配秩序に他ならず、そのこと自体が階級支配の貫徹を意味しているという把握が欠けぬし不足していたことがある。そして、そのことは、前述の通り、平和と繁栄そして進歩等々の神話が疑いをさしはさむ余地のないものとして存在している。

東大斗争において「日常性からの脱却」「内なる東大の破壊」ということが話られるとき、それは、大学における支配秩序の破壊のみならず、「大学の自治」なる秩序概念を支えている学問研究及び教育にまつわるあらゆる神話の破壊を意味するのである。「学問の自由」、「教育の中立」などに始まって、「真理の探究」、「科学の進歩」などが絶対善、絶対真とされる神話である。(以下次号につづく)

八編 集 後 記

※「政治」という「重々しい現実」が地上に存在し、我々の「生活」の一切を重い鉄鎖で縛りつけ、その規制隷属状況を突破し、真に「人間的」な生き生きとした活動を我々が開始せんとすると、それは「合法性」の名のもとに「牢獄」という我々の「日常性」の極端化した場所へ我々をたたく込む、——いわば「社会的」類的存在としての人間にとっては一種の「死」であるが——それは現在の体制が続くものと考えるな

らば、このような人間性ハク奪も合法性のもとに行われ続けられるだろう。

このパンフレットは「政治」という「黒い死」をもたらしものが地上に存在し続ける限り、発行され続けられなければならないという痛苦にみちた予感を感じる。

※4・28沖繩斗争の個人的総括
時計台前総決起集会を当初の予想に反して(せいぜい二・三百名といたったところ)二千名の大衆動員をかちとり、長蛇のデモが続いたことと嬉しいことと悲しいこと。

地から湧いた様に、天から降ってきたかのように集まった学生。その大半は今までネトライキを決め込み、全共斗運動も厳しい状況を主体的に担ってきたのではないのではないかという疑問——全共斗内々見学連々の問題。

彼らは又下宿へ帰り、家の中で発酷し続けるのだろうか。当日の指導部の問題。二千の学生大衆の指揮ができる力量。当然結果した大衆に対し全共斗指導部は責任をもって意志一致し、指導しなければならなかった。明確な意志一致もたず行動一致もなく高架線上に引き入れた責任の重大さ。また戦術の幼稚さ。「左翼」とは「科学」と全ゆる「情報」を駆使し、大衆に責任をもって行動しなければならぬということ想起しなればならぬだろう。(真崎)

お 知 ら せ

獄中で斗う同志との公開文通の場として、毎週一回発行の予定です。今回掲載の手紙に対する感想・返事などがありましたら、真崎宛にお送り下さい。
なお、獄中同志からのお手紙をお持ちの方は連絡して下さい。

第二版 五月四日 印刷発行
発行者 「獄中書簡」発行委員会
委員長代行 加藤 二 郎
文京区向丘1の12の7
東大追分寮内 猛 811 二 三 六 八
真崎 哲